日本計量生物学会 ニュース・レター No.33

1990年10月

目次
巻頭言
第15回IBC・フタバスト印象記
国際計量生物学会の刊行物委員会の報告
第16回IBCに対する Invited Session 等の提案募集について
毒性試験のための生物統計シンポジウムについて
International Biostatistics Conference in the Study of Toxicology - Call for Papers
論文投稿のお願い
理事会議事録(抄)
関連学会等のお知らせ
会計理事からのお知らせとお願い
その他

大橋 靖雄(東京大学保健学科疫学教室)
今年8月初め、カリフォルニア州アナハイムで開催された第6回国際薬剤疫学に出席した。登録者数230人という小じんまりとした学会であったが、議論されている内容は極めてホット、生物統計学のレベルもかなりであり、日本の現状と合わせると考えさせられるところの多い会議であった。

薬剤疫学を一言で定義すれば「薬剤のリスクとベネフィットを客観的に評価するために疫学的手法を応用する学問」ということになろう。とくにこれまではリスクの面に重点が置かれ、副作用に関する研究が薬剤疫学の名前で、とくにアメリカ・カナダを中心に展開されてきた。副作用は一般にきわめて稀な現象であり、副作用を調べる目的でのみ大規模な実験・調査が行なわれる例はまずない。従って保健・医療サービスの供給に伴って(半)自動的に生成されるデータベースを研究に利用しようという方向が主流である。例えばアメリカの困窮者向け保険制度MEDICAIDについて、その対象者の一部約800万が登録されているデータベースCOMPASSが研究に盛んに利用され、非ステロイド消炎鎮痛剤と消化管出迫の関連などが調べられている。ロードアイランド州では州政府・病院会・医師会・保険会社が協力したレコードリンケージシステムが医療サービス評価のために構築されており、100万人の住民に対して行な

薬剤疫学とデータベース

われる入院投薬70-80%、外来処方80-90%と、投薬後の入院・処方・死亡・発がん(がん登録による)との関連が調べられるようになっている。カナダのサスカチュワン州のレコードリンケージシステムも同様なものであり、薬剤疫学の研究に大きな貢献を果たしてきている。

学会では、方法論の研究・独自に行なわれた疫学的調査研究などに加え、このようなデータベースを利用した研究も数多く発表された。例えば1987年にLancet誌上に7例が発表されたマイナートランキサイザーBenzodiazepinと出生異常の関連については、ミンガン州のCOMPASSデータベースを調べ、80人の実用妊婦が洗い出され、このような事実は確認できなかった旨の報告があった。提起された問題に対し迅速に答えを出せる点、データベースの威力は絶大である。

薬剤疫学の研究に役立つデータベースについては、Data Resource Handbookとして既にアメリカ・カナダ編が編集され、日本でも編集の作業が続けられている。しかし、前途は多難である。データを公共のものとして蓄積し利用しようという考え方が希薄なこと、一部に存在するプライバシーに対する過敏なまでの反応、医療サービスの実態が明らかになることへの反発(?)、疫学的考え方あるいは疫学研究者の層の薄さ等々、理由は数多く挙げられるが、薬剤を生産し更に商品と

して輸出する大国として、日本が良質のデータを提供することは世界各国が強く期待するところである。

どのようなシステムが必要なのか、許認可の責任を負う官、市販後の調査・研究が商品としての薬剤の価値を大きく決定することに気づき出した産、そして学が協力することがまさに必要な分野であろうという思いで帰国した次第である。

第15回 IBC・ブタペスト印象記

ハンガリーの首都ブタペストは私にとっては、初めて訪れる異国であり、東側諸国のなかでは最も西側寄り・親日的・きれいな町、という事前情報はもってはいたものの、最近の東側諸国の自由化運動などの政情不安から、実際に訪問するまでは、不安と期待がいりまじった心境であった。ブタペストへはオーストリーのウィーンから列車で（約3時間）入ったのであるが、国境を越えてハンガリーに入ると、まず目に飛び込んできたのは、きわめて旧型の自動車の群れであった。オーストリーでは新型のベンツ・トヨタ・ミツビシなどが多いのと比べると対照的である。

ブタペスト駅から、大会開催場所かつ宿泊場所である olympia hotel へ行くためにタクシー乗り場へ向かう途中で何人ものハンガリー人(?)から“change money”と要求されたのも、やはり、ここは…さらに、その旧型のタクシーに乗り込んでまたびっくり「スピードメータが故障している!」、運転手は気にもせずスピードをだしていた。

ブタペスト市内の町並み自体は西側と遜色ないようにおもわれたが、建物のくすんだ色（大気汚染の影響か?）が気になった。また、レストランでの食事も、ウィーンでのそれに比べると、おせじにも「おいしい」と言えるものが少なかったが、そこはそこ、外交辞令で“taste nice”……。

このように、経済的側面では、まだまだの感があったが、これも自由すぎる日本を当り前と思っている贅沢がゆえなのであろうか? この都市は、その中心を流れているドナウ川で西と東、ブタ地区とペスト地区の二つに分かれているが、ブタ地区（大会会場）はなだらかな丘陵となっていて、特に、Hilton Hotelのカフェテラスとなっている「漁夫の砦」からの眺めがすばらしい。ドナウ川

の流れとそれを飾るさまざまな意匠を凝らした橋の数々。また、学会の excursion の boat trip に参加したときの夜景の美しさ…

さて、本題からかなり離れてしまったようであるが、会議全体の報告は他に用意されているということなので、少しだけ第15回 IBC の話題に移ろう。今大会は Fisher 誕生100周年を記念して、その招待講演が組まれたせいも、前回のナムール大会より参加者が多いという事務局の発表であったが、全体的に、静かな会議であったように思われた。

私は、疫学、遺伝学、臨床試験、生存時間データの解析等のセッションの中から興味のあるのだけをつまみ食いしたので、全体の傾向は把握していないが、内容的には特記すべきおもしろさ・新しさはなかったように思われる。プログラムのには、むしろ、9月にフランスのニーム(Nimes)で開かれた the 11th International Meeting on Clinical Biostatistics の方が工夫が凝らされていたように思われた。

ただ、若い女性の発表者が目立ち、その自信あふれた(?)発表ぶりは、大いに日本人も参考にすべきことのように思われた。

丹後俊郎（国立公衆衛生院疫学部）

国際計量生物学会の刊行物委員会の報告

IBS (International Biometric Society) の刊行物委員会 (Editorial Advisory Committee) のメンバーに任命されたので、ブタペストの国際会議で開かれた委員会に出席しました。外にどんなメンバーがいるのか、任期がいつまでか知らされていないのですが、出席したのは、10人でした。

細かいことはさておいて、会員にとって大きな影響を与えそうなことは Biometrics と会費のことについて2~3年以内に大きな変化を起さざるをえないという議論でした。

Biometrics は現在年4冊です。投稿論文に対して採択率は20%ほどです。つまり5編に1編が雑誌に載るだけです。(ちなみに、JASA の採択率はもっと低いそうです。) それにも拘わらず、現在、滞貨が1年分あります。いま採択されたものが印刷されるのは1年後です。投稿してからだと、2年が珍しくないでしょう。発行が遅れると、

たとえば AIDS のように現在の緊急課題のものは、価値が損なわれることとなります。ではどうしたらよいか。

たとえば、投稿料 Page charge をとるという案がありますが、そうすると金のあるものが優先され、開発途上国の人間が後回しになります。臨時増ページで発行を5割増しにすると、遅れがなくなります。それが数千ドルが必要になります。財源の調達との兼ねあいですが、なんらかの手を打たざるをえません。近いうちに評議会・理事会で方針が出されることとなります。こういう問題に対しわれわれ日本も積極的な提案意見を出す義務があるんだらうな、と思いながらそれができませんでした。

Biometrics についてのもう一つの問題は、応用を主にした Biometrics B というシリーズを出そうという提案です。これは近年医学関係の Sophisticate された論文が多くなり、遺伝、農業、生態学関係の実際問題の論文が少なくなり、必ずしも数学の素養が十分でない生物関係の人にとって雑誌が魅力なくなっているのではないかと、という議論です。AMS が AS と AP に別れたときのこと、Statistical Science のことなどが対比として話題にされましたが、一応前向きに理事会で考えることになりました。ということは、新しい雑誌を発行し、したがって会費を値上げしたり、購読の選択を迫られたりということが2~3年以内に起こりそうだということです。いや3人称的にいうのはいけないので、われわれはそれにリードされるだけでなく、意見をいい、提案をしていかなければならないということです。さあどう考えればいいのでしょうか。

3番目は、Biostatistica のことです。ご存知の方も多と思いますが、Biostatistica という抄録雑誌がこの春から発行されています。これを国際計量生物学会の準機関誌的に会員に優遇配布したらどうかという提案です。別に買うよりずっとやすくなるというわけです。これについても開発途上国にとって損か得かが議論になりました。結果として、全会員への配布という方向で、理事会に報告・提案することになりました。

これに関連して、財政の苦しさが報告されました。会費の値上げは確実のようです。Japanese Region としてどう対応するか、会員の皆さんの

論議を待ちたいと思います。

他に議論がいろいろありましたが、これは省略します。

吉村 功 (名古屋大学工学部)

第16回 IBC に対する Invited Session 等の提案募集について

標記の国際会議が1992年にニュージーランドのハミルトンで開催されますが、現在、Scientific Programme Committee が Invited Paper Session と招待講演者について考慮中のことです。

Scientific Programme Committee には日本のメンバーとして伊藤孝一氏が参加されています。

会員のなかで、Invited Paper Session 等について御提案をお持ちの方がございましたら、出来るだけ早く伊藤氏の方へ御連絡下さい。

伊藤氏の連絡先は次の通りです。

〒466 名古屋市昭和区山里町18
南山大学
Tel. 052-832-3113

毒性試験のための生物統計シンポジウムについて

このたび毒性試験のデータ解析に関する最先端の話題をテーマにした標記シンポジウムを開催致します。本シンポジウムは1991年5月に東京で開催される「毒性研究のための計量生物国際会議」に向けての準備を兼ね、当該分野の国際的な動向のレビューも目的としております。活発な質疑によって問題点が明確になるよう、広く関係各位の参加をお待ちしております。なお、詳細は差し込みの資料をご参照下さい。

日時：1990年12月14日(金)、15日(土)

場所：野口英世記念会館 2階講堂
(東京都新宿区大京町26)

主催：計量生物国際会議組織委員会

連絡先：〒101 東京都千代田区神駿河台3-2
山崎ビル

(株)サイエンス社内

医薬安全性研究会

Tel. 03-253-8992

Fax. 03-255-6847

INTERNATIONAL BIOSTATISTICS CONFERENCE
IN THE STUDY OF TOXICOLOGY

May 23 - 25, 1991

University of Tokyo, Japan

**CALL FOR
PAPERS**

OBJECTIVE

To discuss the effective application of statistical methods in toxicology research, bringing together biostatisticians, statisticians, mathematical scientists and toxicologists. This is the first conference of this type held in Japan. The exchange of different ideas and methodologies developed or developing in each country is valuable and important to the development of research in toxicology. In addition to the invited talks, the poster session will be held for contributed papers. Registration of more than 100 scientists from universities, government, and pharmaceutical companies is anticipated. Conference Proceedings will be published.

TOPICS

Analysis of short-term experiment (Design, Analysis, Performance)
Analysis of long-term animal experiments (Survival time and time-to-tumor,
Multiplicity, Combining data)
Risk assessment (In-vitro to in-vivo, In-vivo animal to human, High-dose to low-dose)

Organizers:

Dr. David G. Hoel (NIEHS)
Prof. Akira Sakuma and
the Local Organizing Committee

Supported By:

The Biometric Society, Japanese Region
National Institute of Hygienic Sciences, Japan
National Institute of Environmental Health
Sciences, USA
Environmental Mutagen Society of Japan
Japanese Society for Biopharmaceutical Statistics

To have a paper considered
for presentation, send a 500-word
abstract:

Prof Akira Sakuma, Chairman
Local Organizing Committee
Dept of Clinical Pharmacology
MRI, Tokyo Medical & Dental Univ
2-3-10 Kandasurugadai, Chiyoda-ku
Tokyo 101, Japan
TEL/FAX 81-3-291-9576

To obtain registration information
or to be included on the mailing list,
contact:

Prof Isao Yoshimura, Secretariat
Local Organizing Committee
c/o SAIENTISUTO-SHA
3-2 Kandasurugadai
Chiyoda-ku, Tokyo 101, Japan
TEL 81-3-253-8992
FAX 81-3-255-6847

論文投稿のお願い

従来 Bulletin は本学会の年会の Proceedings としての役割を果たしてきましたが、会員相互間の研究情報の流通、伝達手段として、より有効に機能する Bulletin をめざすため、年会に発表された論文以外に、『投稿論文』、『特集論文』なども掲載し、幅の広い内容を持った Bulletin へと改善することが去る1986年度第1回理事会で決定されております。活発な投稿を促す意味も含めて、Preprint 的な論文も歓迎しますが、日本語ワープロ、もしくは英文タイプの原稿作成を条件とします。会員各位の研究成果の積極的な御投稿をお願いします。なお、投稿に際しては予め投稿用原稿用紙および原稿作成要領を事務局あて御請求下さい。なお事務局の住所は本ニュースレターの最終頁に記載されています。

Bulletin 編集担当理事 吉村 功

日本計量生物学会1990年度第2回理事会議事録(抄)

日時：1990年6月4日(月) 18:00~20:00
場所：私学会館 アルカディア市ヶ谷
出席者：佐久間(会長)、奥野、後藤、駒澤(会計)、塩見、正法地(庶務)、高木、丹後、柳井、吉村、栗原(事務局)
報告・審議事項：昨年度の会費を支払っていない7名の会員を除き本部会費を送金した。1990年度年会参加者は103名であった。毒性研究のための計量生物国際会議を他の学会と共催で開催を計画している。プレシンポジウムとして1990年12月14-15日に東京大学山上会館で現在の研究水準のレビューのためのシンポジウムを開催する予定である。開発途上国援助基金について審議した。

関連学会等のお知らせ

応用統計学会第12回シンポジウム

日時：1990年10月29日(月)、30日(火)
場所：大阪府市立大学交流センター
(大阪市北区梅田1-1-3-1700
大阪駅第3ビル16階)

テーマ：多変量データ解析の実際
問合せ先：〒223 横浜市港北区日吉3-14-1
慶應義塾大学理工学部数理科学科内
応用統計学会事務局
Tel. (Fax) 045-562-4442

参加費：正会員2,500円、学生会員1,000円、非会員4,000円

統計数理研究所大学共同利用機関改組5周年記念講演会

日時：1990年11月2日(金) 14時~16時30分
場所：統計数理研究所講堂
講演題目：古川 俊之(国立大阪病院)
「生命における物理法則」
赤池 弘次(統計数理研究所)
「統計科学の将来」
石黒真木男(統計数理研究所)
「電波望遠鏡データ解析」
問合せ先：〒106 東京都港区南麻布4-6-7
統計数理研究所庶務課
Tel. 03-446-1501 Fax. 03-443-3552

第49回日本公衆衛生学会総会

日時：11月7日(水)~9日(金)
場所：徳島市立文化センター、
(徳島市徳島町城ノ内1)
徳島県郷土文化会館、ほか10会場
(徳島市藍場町2-14)
連絡先：〒770 徳島市蔵本3-18-15
徳島大学医学部公衆衛生学教室内
第49回日本公衆衛生学会総会事務局
Tel. 0886-33-3481(直通)
0886-31-3111 内線2272

日本疫学会の御案内

【入会の御案内】

このたび、日本における疫学研究の進歩と発展と疫学研究者相互の交流を計ることを目的に、種々の分野の疫学研究者が大同団結して、日本疫学会を発足致すこととなりました。本会は International Epidemiological Association の日本の受皿としての性格を持つものであり、学術研究会の開催、学会雑誌の発行および国際交流事業などを主な事業と致す予定であります。

本会の趣旨に賛同し入会を希望される方は、下記事務局まで御連絡下さい。入会に必要な書類をお送り申し上げます。

事務局：〒466 名古屋市昭和区鶴舞町65
名古屋大学医学部予防医学気付
日本疫学会事務局
(Tel. 052-741-2111
Fax. 052-733-6729)

【学術総会の御案内】

日本疫学会は、第一回の学術総会を下記の要領で開催致します。

1. 学会長 小町喜男 (筑波大学)
2. 期日 1991年1月24～25日
3. 場所 国立がんセンター国際研究交流会館
東京都中央区築地5-1-1
(Tel. 03-542-2551)

会計理事からのお知らせとお願い

1) 1991年度会費について

(1) A会員 (国内会員) の会費は1990年度総会 (1990年4月20日) において1991年度から1,000円の値上げが認められ、1991年度からの会費は3,500円になります。

(2) B会員 (国内・国際会員) の本部送金額が1991年度から35ドル/人 (現行22ドル/人) に大幅値上げされます。本部からの連絡による値上げ理由は、Biometrics誌の今一層の充実を図るために、応用分野関係の論文を中心に100頁の増頁編集、および郵送費の値上がり分の対策が主な理由です。

本学会ではこの対策を9月26日の理事会において討議致しました。討議の結果として、①A会員との均衡、および当面の学会運営の健全財政を考慮して1991年度から「1,000円の値上げ (案)」を来年の総会に提案することとし、総会前に値上げに賛成いただける方については、事前に1991年度会費納入に当たって、現行7,000円に1,000円を加えた計8,000円を暫定的に納入していただくをお願いをすることとした。②今後、B会員の会費額の適切な在り方については理事会で慎重にいろいろな視点から討議し、早急に草案をつくり総会で審議していただく予定とした。

B会員のご理解とご協力をお願い致します。なおC会員の会費は現行通りです。

2) 1990年度の会費未納の方へお願い

本年度はまだ40数名の未納の方がおられます。早急に納入をお願い申し上げます。本学会の会計年度は国際計量生物学会に合わせて1～12月です。(ニュース・レターNo.27でお願いしましたように、前年度分までの会費未納者 (A会員を除く) にはBiometricsが届かなくなります。未納の方は本年度分と合わせ至急納入をお願い申し上げます。)

会費	1990年度	1991年度
A会員	2,500円	3,500円
B会員	7,000円	8,000円 (予定)
C会員	4,500円	4,500円

郵便振替口座：

東京5-22365 日本計量生物学会

銀行振込口座：

第一勧業銀行飯田橋支店

普通 061-1499027

日本計量生物学会 会計理事 駒澤 勉

日本計量生物学会事務局

〒162 東京都新宿区神楽坂1-3

東京理科大学工学部経営工学科

奥野研究室

Tel. (03) 260-4271内339

栗原恵美子